

綾足と秋成と

十八世紀国学
への批判

佐藤深雪著

名古屋大学
出版会

《著者略歴》

さとう みゆき
佐藤 深雪

1953年 東京に生まれる
1979年 東京都立大学人文科学研究科博士課程中退
静岡県立大学助手などを経て
現在 富士フェニックス短期大学助教授
著書 『山東京伝集』（叢書江戸文庫18, 1987年）

綾足と秋成と

1993年4月30日 初版第1刷発行

定価はカバーに
表示しています

著者 佐藤 深雪

発行者 浅井 淳平

発行所 財団法人 名古屋大学出版会

〒464-01 名古屋市千種区不老町名古屋大学構内
振替名古屋 2-11638

電話(052)781-5027/FAX(052)781-0697

© SATO Miyuki 1993

Printed in Japan

印刷・製本 (株)クイックス

ISBN 4-8158-0200-9

乱丁・落丁はお取替えいたします。

綾足と秋成と——十八世紀国学への批判——

目

次

序 章 真淵門下の詩と散文の革新運動

..... 1

一 綾足における詩と散文 1

二 秋成における詩と散文 7

第Ⅰ部 建部綾足

第一章 『本朝水滸伝』のトポロジ 17

一 『本朝水滸伝』と壬申の乱 17

二 『本朝水滸伝』と柘枝伝説 22

三 宣長・綾足・秋成 30

四 『本朝水滸伝』のトポロジ 33

五 『本朝水滸伝』と「天武紀」 39

第二章 綾足の自我のかたち 47

第三章 日本浪漫派と綾足 57

一 保田與重郎の綾足評価 57

二 戦後の「みやび」論	68
-------------	----

第四章 「みやび」と『本朝水滸伝』	75
-------------------	----

一 国学者たちの「みやび」論	75
二 「みやび」と『本朝水滸伝』	85

第五章 『伊勢物語』と雅文体小説	101
------------------	-----

一 国学者たちの物語論	101
二 国学の潜在的可能性	115

第II部 上田秋成

第一章 偽書と異本	127
-----------	-----

一 十八世紀国学と『春雨物語』	127
二 「日の神論争」における宣長と秋成	132
三 『古今集』をめぐる宣長と秋成	139
四 徳川出版機構における宣長と秋成	143

第二章 十八世紀の古典学

..... 149

- 一 国歌八論論争 149

- 二 真淵の万葉学 155

- 三 秋成の万葉学 159

第三章 『春雨物語』という装置

..... 171

- 一 『春雨物語』の構成 171

- 二 「死首の咲顔」論 176

- 三 「宮木が塚」論 186

第四章 『春雨物語』の主題

..... 197

- 一 『春雨物語』のメインテーマとサブテーマ 197

- 二 「二世の縁」と信仰 203

- 三 言葉、そして不在の国家 212

第五章 『源氏物語』と雅文体小説

..... 223

- 一 雅文体小説の可能性 223

二	『春雨物語』と『源氏物語』	228
三	『ぬば玉の巻』の『源氏物語』論	236
四	物語はいずこへ	245

付 論 折口信夫における新国学論の座礁

一	新国学論の出發——本居宣長の抹消	257
二	新国学論のゆくえ——国学者の散文	265
三	新国学論の確立——柳田国男の抹消	271
四	新国学論の座礁——神の抹消	276

.....257

あとがき	283
初出一覧	卷末 9
人名・書名索引	卷末 3
英文要旨	卷末 1

序 章 真淵門下の詩と散文の革新運動

一 綾足における詩と散文

綾足への招待

綾足は芭蕉の「重さ」を批判する。

先試に此古池・唐崎・木槿などの兩三句を、前に出せる句に並べあはせて、幾度も／＼清吟せよ。調おもくして碎たらん。（『片歌二夜問答』、建部綾足全集3）

芭蕉俳諧の意味の過剰さに対する、これは、調べのかるやかさの主張である。一方、綾足が推賞する芭蕉の善句とは、つぎのようなものである。『片歌二夜問答』に並べ示された「前に出せる句」のなかから引用しよう。

熱閃や暗の方ゆく旋目の声

秋深き隣はなにをする人ぞ

告天子よりうへにやすらふ絶頂哉^{ヒバリ}

完結してしまいそうになる一句の鋭利な先端を、闇や空間へむかつて解き放ってゆくような「軽さ」が評価されている。それに対して、「古池や蛙飛びこむ水の音」「辛崎の松は花より朧にて」「道のべの木槿は馬に喰はれけり」（『俳句大観』）の三句は、そのまま一幅の絵画であり、物語であり、一句の完結性を志向する。そのために「重い」のである。

綾足の芭蕉批判は、時代の潮流に対する一つの明確な戦略であった。ここで主張されている「調べ」とは、賀茂真淵によって発見された詩歌のあたらしい評価基準であり、真淵はそれを万葉研究から持ちきたったのである。「調べ」の主張は、綾足がまぎれもなく真淵学徒であったことを明かしているが、「調べ」の説だけでなく、雅俗論もまた真淵から綾足が学んだものである。右の芭蕉の俳句について見ても、綾足は、その文字を通用の「認字」ではなく「正字」によって正すという処置を加えている。綾足は、「歌を解く時は正しくし、俳諧の時は漫にす」という状況に対して、あえて俳諧の雅俗を問いかけたのであり、そのとき芭蕉が一つのおおきな標的となったのである。

その『片歌二夜問答』は、宝暦一三（一七六三）年の序をもつ片歌唱導の宣言書であった。俳諧における宝暦年間とは、まさに蕉風への復古が準備されつつあった時代であり、宝暦・明和・安永から天明に至り、いわゆる天明俳諧は芭蕉への復古を特色とする。この潮流に対して、綾足は、蕉風復古をはるかに飛び越して、『万葉集』への復古を宣言したのである。ここで綾足がよって立つところは、すでにじゅうぶん手垢にまみれてしまっている俳諧ではなく、『万葉集』にもとづいた真新しい片歌

である。綾足の芭蕉批判は時代に対する一つの戦略であったが、そこで意図されているのは、『万葉集』をよりどころとした詩の革新運動であったと考えられるのである。⁽¹⁾

ところで、万葉主義にもとづく詩の革新運動と言えば、保田與重郎の『万葉集の精神』（昭和一七「一九四二」年、筑摩書房）などを代表格とするエモーショナルな復古主義を、どうしても思い出さざるをえない。事実、綾足という作家は、保田與重郎を筆頭とする日本浪漫派によって、昭和一〇年代にあたらしく見いだされたのであり、それまでは、幸田露伴の評価をべつにすれば、ほとんどかえりみられることがなかったのである。⁽²⁾ いまことあらためて綾足における詩の革新運動を言うのは、悪夢の再来ではないのか。

この危険を避けて、綾足の片歌唱導を俳諧革新運動のなかで考えることが普通はおこなわれている。しかし、これでは、俳諧という詩のなかに解毒作用（批評）が先験的にあるとみなして、その解毒作用に頼ってしまうばかりのことにならないだろうか。そして、また、「宝の山の俳諧を捨て、片歌一道の祖といはれん事をねがひたる志捨がたし」（『続近世畸人伝』）という、綾足の動静を伝えている同時代人伴蒿蹊さえもみとめた、片歌唱導の清新な意義を見失ってしまうことになるのではないだろうか。

綾足の片歌唱導は、やはり詩の革新運動のなかで考えるべきであらう。このとき、あらためて問うなら、日本浪漫派を引きずる悪夢の再来ではないという保証をどこに求めたらよいのか。私の考えでは、綾足の片歌唱導は、詩の革新だけで完結するものではなく、同時に、散文の革新を不可欠のもの

として随伴している。綾足の詩は、批評としての散文を最後まで伴っていたのであり、その散文にならざる高度な批評性によって、詩と散文の拮抗をよく保ったのである。そこに一定の解毒作用を見いだすことができるだろうというのが私の見通しである。

詩と散文の両方にわたる革新のころみは、綾足だけに見られるものではなく、秋成についても、まったくおなじように觀察することができる。おなじ真淵門下の綾足と秋成について、詩と散文とをけざやかに対比させた革新運動が踵を接してあらわれるのである。まず、綾足の片歌唱導と長編読本の嚆矢となった『本朝水滸伝』が興り、つぎに、秋成の長歌と異色の短編読本集である『春雨物語』がそのころみを追う。この雅文体によって書かれた二つの読本は、ともに真淵の万葉学から学んだ斬新な文体実験であつたと言える。雅文体とは、ある特定の時代に雅言意識を照準した擬古文体であり、綾足と秋成は、その雅言意識を真淵から学んだのである。そして、片歌と長歌もまた万葉研究からもたらされた真淵の主張にもとづくものであつた。このような真淵門下の詩と散文の革新運動の一つとして考えたとき、綾足の片歌唱導は、そのもつとも本質的な側面を、われわれに示してみせるはずである。

以下では、まず綾足に即して、真淵門下の詩と散文の革新運動の粗いデッサンをこころみることにする。

綾足が見いだした詩と散文それぞれのあたらしい形式とは、片歌という短詩型と、読本というジャ

ンルに分類される長編小説である。綾足の片歌が、限りなく自分ではないほうへ向かう詩的跳躍であったとすれば、綾足の雅文体小説は、限りなく自分であろうとする散文的達成である。綾足においては、自分という桎梏から限りなく疾走する詩が、そのまま未知の自分を発見する散文となり得たのであり、これは、綾足という人間における詩と散文のたいへん幸福な連動である。

建部綾足は、享保四（一七一九）年に弘前藩家老喜多村氏の次男として江戸で生れ、弘前に育った。嫂そねとの恋愛事件を起こして、二十歳のとき弘前を出奔してから、ついに故郷に帰ることなく、生涯を放浪の旅に送った。延享四（一七四七）年、二十九歳のとき、江戸浅草金龍山下に吸露庵を結んで、俳号を涼袋と改め、伊勢派の宗匠として立っている。『続近世畸人伝』によれば、綾足の俳諧は、「風儀は伊勢にて、しかも新奇自在のもの也。されば此伎をもて富をなすもの、浪華の淡々（たんたん）と此人に並ぶものなしと聞ゆ」と称せられるものであった。

宝暦三年に、中津侯奥平昌敦に仕え、翌年画道修業のために長崎へ旅立った。江戸に帰った綾足は、奥平侯の面前で、画道修行の成果として墨黒々とした山芋の絵を描いて出仕を辞したという。奇行の人である。

宝暦一三年には、『片歌二夜問答』に見られるように、俳諧を排して片歌を唱え、真淵に入門してより、いよいよ片歌を宣揚した。片歌は、『古事記』の「にひばりつくばを過ていくよかねつる」という日本武尊の旋頭歌に由来することから、綾足は、武尊の顕彰碑を伊勢の能保野に建てたり、また、華山院右府常雅公に請うて、片歌道守の額を賜ったという。片歌は『万葉集』にもとづいた復

古の詩形式であるにはちがいないが、同時に、綾足にとっては、あたらしい詩趣を盛ることのできる当代未知の詩型であったと言うべきであろう。

綾足の雅文体小説

真淵の国学に触れたことは、片歌だけでなく、その対極に、はるかに重要なもう一つの成果をもたらしした。明和五（一七六八）年刊行の『西山物語』と、安永二（一七七三）年に前編が刊行されている『本朝水滸伝』という雅文体小説である。この二つは、『古事記』『日本書紀』『万葉集』『伊勢物語』などの上古の語彙を意図的にもちいることによって、上古風の擬古文体を作り出したことに画期的な意義がある。

上古主義は、言うまでもなく真淵の主張するところである。「国意考」「歌意考」「文意考」「語意考」「書意考」と表題された真淵の「五意考」は、宝暦一〇（一七六〇）年前後には成立していたが、この「五意考」によって、真淵は、世界観までも含んだ包括的な詩（歌）と散文（文）の革新運動の指針を提示したのである。そして、真淵が構想した詩と散文の革新運動を、綾足は、その上古主義とともに正確に踏襲した。綾足の片歌が、この革新運動の詩的成果であると言えるのであれば、そのあざやかな散文的成果こそは、雅文体小説としての『本朝水滸伝』であった。

『本朝水滸伝』は、雅文体小説であるとともに、『水滸伝』にならうことにおいて、翻訳を契機とする読本の流れに棹さす作品である。そして、江戸における長編読本の流行に先立って、すでにはやく

長編性を実現していることにおいても画期的な意義をもつ。そのために、滝沢馬琴は、『近世物之本江戸作者部類』のなかで、その列伝体読本史を、まず綾足から説き起こさなければならなかったのである。実際にその波及するところは広く深かった。江戸長編読本の嚆矢とされている山東京伝の『忠臣水滸伝』（寛政二一「二七九」年前編刊）は、『本朝水滸伝』に学び、『善知安方忠義伝』（文化三「二八〇六」年刊）も同書からおおきな影響を受けている。

このようにして、真淵入門前後の綾足は、片歌という復古にしかつ未知の詩型をこころみるとともに、雅文体の長編読本というあたらしい散文を、めざましいばかりの斬新さで、はやばやと達成してしまったのである。年代的には、宝暦末年の片歌唱導から、安永二年の『本朝水滸伝』前編出版までのあいだ、十八世紀なかばのことである。綾足は翌安永三年に五十六歳で急死している。

二 秋成における詩と散文

秋成の長歌と万葉主義

秋成は綾足より十五歳の年少であり、綾足の紹介によって真淵高弟の加藤宇万伎（まき）に入門したのが明和四（一七六七）年、秋成が三十四歳のころである。秋成は、真淵が提起した詩と散文の革新運動を、綾足とおなじようにたどりながら、しかも、綾足とはまったく対照的な成果をあげている。それは、長歌という物語的な叙事詩のこころみと、雅文体の短編読本集である『春雨物語』とである。

綾足の片歌も、秋成の長歌も、ともに真淵の万葉研究に由来する古典的な詩歌形式の復興でありながら、とくに秋成の場合、その古い器に盛られているのが、あたらしい時代を予告する重厚な主題を詠み込んだ詩であることにおいて際立っている。

秋成が長歌という詩型に情熱を注いだことは、浅野三平の『秋成全歌集とその研究』に集められている二四五四首のうち、長歌一一七首を数えることができ、それに対して旋頭歌は、わずか二首にすぎないというところに、ほぼ窺うことができるだろう。ちなみに、『秋成全歌集とその研究』に占める長歌数は約五パーセントであり、この数字は、『万葉集』四千五百数十首中に占める長歌約六パーセントに匹敵する。

また、その意味で注目すべきは、『春雨物語』の「宮木が塚」という作品である。この一篇には、『春雨物語』中ただ一箇所だけ長歌が用いられている。宮木という女主人公を語る物語本文に加えて、さらにそのあとに長歌一首がならべ記されているのである。短編小説と長歌一首がまったく対等に拮抗したまま投げ出されているのであり、これは秋成の最晩年における詩と散文のありようを示したものと考えられる。秋成は、長歌という詩型のなかに、宮木の物語の主題をたしかに受けとって成熟してゆくはずの、あたらしい詩の可能性を見ていたものとおもわれる。

一方、綾足の『本朝水滸伝』に対しては、秋成の『春雨物語』を挙げることができるだろう。この二つは、同時代の長編読本や短編読本集に比較して、それぞれ傑出した金字塔である。そして、本書でこれから中心的に論じることになるこの二つの散文的成果は、真淵門下以外のところからは、けっ

して導き出されるものではなく、したがって、二つの散文小説のためには、真淵門下の散文革新運動を考えてみなければならぬのである。

真淵門下の綾足と秋成

ここでとくに真淵門下ということを強調するのは、真淵の万葉主義・上古主義を、宣長の中古主義と対比させて考えるためである。宣長は、宝暦一三（一七六三）年に松坂に来訪した真淵との対面の一夜を経て入門した真淵の高弟である。しかし、真淵との出会いまでに、宣長は契沖の歌学に私淑して生涯の歌風を確立し、そのうえに『源氏物語』論である『紫文要領』をすでに完成していたのである。京都遊学時代につちかわれた宣長の中古主義は、真淵の提唱する上古主義とは、はげしく対立するはずのものであった。図式的に言えば、真淵に反発しながら中古主義におおきく傾く文学論をかためてゆく宣長に対して、綾足と秋成は、真淵の上古主義をうけつぎつつ、詩と散文の創作実践において清新な成果をあげたと見ることができる。

ここでは真淵門下の散文革新運動を、宣長と対比させながら考えてゆくことにしよう。宣長の長い生涯を、真淵への入門の年、すなわち『古事記伝』起筆の前年を境にして前期と後期の二つに分けて考えるなら、前期は綾足に、後期は秋成に、それぞれ対応させて考えることができるようにおもわれる。

宣長の前期を特色づけているのは、「もののあはれ」論である。宣長の『源氏物語』論であり、後